

田園文化都市としての三田市のなりたち

三田市史執筆委員・岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授 藤井 和佐

はじめに

人～農業者の生き様～に注目することによって、空間構造～農村・町場・都市のつながり～と、時間構造～農業とともにあった三田市～とがみえてくる。

1. 農家数・農業者数の推移（資料 381・382 より）と三田農業

(1) 専兼別農家数 1960(昭和 35)年 専業 1,018、第 1 種兼業 1,247・第 2 種兼業 821 戸
2005(平成 17)年 専業 232、第 1 種兼業 163・第 2 種兼業 1,404 戸

(2) 農業就業人口 1960(昭和 35)年 総数 7,569 (男性 3,126・女性 4,443) 人
2005(平成 17)年 総数 2,630 (男性 1,143・女性 1,487) 人

○農家数は大幅な減少傾向にあるが、数ではなく質の問題としてとらえるべきである。また近年は農業における生産・加工・販売の各局面において担い手として女性の占める役割が高くなっている。

(3) 三田市における農業の位置づけ (資料 334「中核産業としての農業に関する議会質問」)

○「都市と農村が共生する三田」は、農村を市内にもつことで「農村の持つ多面的な機能」(食、環境、教育、観光等)というメリットを享受している

2. 「農」の礎

(1) 三田牛をつくる (資料 377「肉牛肥育の名人」)
(2) 集落の自治 (資料 351「川除区の水あて当番制度」)
(3) 過疎の村の取り組み (資料 352「永沢寺花菖蒲園の業績」)

○三田の農業には、従事する人々がさまざまな苦労を重ねながら、伝統を受け継ぎつつ、誇りを持ち、新たな展開をみせてきた歴史がある。その事例を代表的な酪農・米作・園芸に関する人々の営みを物語るこれらの資料からも読み取ることができる。

3. 暮らしに活かす「農」～農村女性の活動～

(1) 農村女性のグループ (資料 345「三田市生活改善実行グループの県功労賞受賞」)

○農村女性の取り組みは「生活改善」運動から始まり、現在では農業における女性の役割を反映して「農業改良」と食品加工や生活福祉などの観点を含む「生活科学」の両側面を統合した形で取り組みが進められている。

(2) 商店街のなかの農産物直売所 (資料 348「農産物直売所『ほんまち旬の市』の再開」)

○市街地に生産者と消費者との接点を設ける取り組みは、「都市と農村が共生」(コミュニケーション)する場として有益であるほか、車を運転できない高齢者等に対する生活福祉的な観点からも評価できる。

4. 三田農業を未来につなぐ若者たち

(1) 三田米をつくる (資料 365「有機の米づくりに取り組む」)
(2) 三田で就農する (資料 330「新規就農者の活動事例」)
(3) 農業青年のグループ (資料 355「ゆりのき台自治会と三田耕楽クラブが朝市で交流」)

○意欲ある若者が担い手となって、時代や社会のニーズに適合した三田の農業の新しい展開への模索が始まっている。

おわりに

農業者の営みと住民の暮らしのなかに田園文化は生きており、今の三田市がある。

○「都市」あるいは消費者の立場からは、農業を「農村」における人の営みとして位置付けた上で、その担い手である「農村」の人々の存在(努力・苦労そして誇り)に思いをはせる必要がある。また「都市と農村が共生」していることは、三田市のまちづくりを考える上での戦略上のメリットであることを再認識する必要もあろう。